

Z307a 日本語の「小惑星」の起源

白井 文彦（神戸大学）

小惑星は1801年にGiuseppe Piazziによって発見され、200年以上が経過した現在では80万個以上の存在が知られている。英語の“asteroid”という単語は、移動天体でありながら19世紀当時の最大級の望遠鏡を持ってしても惑星のように空間分解して見えない(恒星状の)点源であるという見た目の特徴から名付けられている(Herschel 1802)。発見者のPiazzi自身は“planetoid”を提唱しているが(Piazzi 1802)、これはあまり広く使われていない。小惑星を意味する単語としては他に“minor planet”があるが、これは1830年代にイギリスで出版されていた航海年鑑(Nautical Almanac and Astronomical Ephemeris)が初出だと言われている。

日本における小惑星の最初の知識は、江戸時代の蘭学者・儒学者によってもたらされたものである。例えば帆足万里(1836)『窮理通』には「設列斯星」(Ceres)や「把兒列斯星」(Pallas)の紹介があり、川本幸民 訳述(1851-56)『氣海観瀾廣義』には、「セレス、パルラス、ユノ、ヘスタ」として4つの小惑星の軌道やその起源についての記述も見られる。しかしこれらの天体を示すものとして「小惑星(小遊星、小游星とも)」という単語は明治時代まで使われていなかったようである。

太陽系小天体として大きな割合を占めるのは彗星と小惑星である。この両者を区別するのはその見た目、すなわちコマや尾のような活動性の有無である。一方、近年では活動性を見せる小惑星(メインベルト彗星、活動的小惑星)が発見されるようになり、彗星と小惑星の本質的な違いが議論されている。そのような科学的背景において、日本語の「小惑星」の起源を考えることは、探査や観測、物質分析において世界をリードする日本の小惑星科学分野の位置付けを考察する一助になるものと思われる。